

## 和製漢語と中国語

陳 力 衛\*

### 1. 和製漢語とは

和製漢語とは日本語の中で形成され、作られた漢語を指している。それを判別する物差しは形態と意味の二つの側面がある。形態からみて漢字の表意性と造語力を生かして、日本語の中で独自に造った、中国本土にない新しい形や組み合わせを和製漢語と呼ぶ。たとえば、

- (イ) 訓読みから音読みへ変わったもの（おほね→大根、ではる→出張）。これは外観上では同じ漢字表記の音読みことばであっても、中味はもともと和語に由来するものである。
- (ロ) 日本独自の組み合わせや表記（焼亡、量見、選考）。古くは記録体のようなものに出てくるものを指すが、近來でも書き換えや新造語の組み合わせを言うことが多い。
- (ハ) 幕末近代以降の漢語訳語（抽象、哲学）。外来概念に対応すべく、日本人が独自に創出したもの。

といった三種類がまず挙げられる。しかし意味から見れば中国語が日本に入ってから、あとで中国本土のものとの間にずれが生じやすく、たとえば「我慢、退屈、挨拶、馳走、料理、勉強」などは中国語出自であっても中国語の当初の意味とはかなり変わっていた。その変化は、当然ながら日本における漢語の受容に伴ったもので、一般に個々の語史の問題として扱われる。そのなかで、

(ニ) 日中の異なる意味を語構成によって分析できる「激動、安置、洋行」などを和製漢語とみなすことができる。

たとえば、「洋行」という語が中国の出典にあるものの、最初から日中の意味構造が違っている。

中国	洋行	(西洋人の商店)	連体修飾
日本	洋行	(西洋へ行く)	動補構造

のように、同じ字面でありながら、語構成によって意味が全然違うものである。

さらに近代漢語訳語のうち、

(ホ) 中国古典語を用いて外来概念に対応させた「社会、経済、文化」

なども和製漢語の対象として扱うことが一般的である。なぜなら、それは時代的にもまた意味的にも新旧の差が大きく、なによりももう一つの参照対象—外国語の意味—との一致度が判断の手がかりとなるからである。

上記のうち、(ロ)の範囲が広く、さらに細分化すれば、

- (1) 「漢字の和化によるもの」(甲状腺、労働、画鋏、返済、高配、稼動、介錯、若輩)。
- (2) 「同音による書き換えのもの」(料簡→了見・量見、蚊虻→文盲、邀請→要請、年輩→年配、穿鑿→詮索、詮衡→選考)。
- (3) 「省略によるもの」(発禁、時効、重文、節電、民放)。
- (4) 「和語的語構成によるもの」(直行、楽勝、酒造、便乗)。
- (5) 「接辞によるもの」(~化、~性、~式、~的)。

\* 成城大学教授

こうしてみると、(イ) から (ホ) までのように和製漢語と呼ばれるものの中身は相当雑多なものが含まれており、純粹の和語から来るものもあれば、外来概念に訳語として当てはめたものもある。むしろ独自の造語もある。性格は一概ではないが、基本的に漢籍に出典のある・なしによって、大きく日本独自の創出 (イ、ロ、ハ) と中国語出自 (ニ、ホ) とに分けることができる。前者は形態重視の産物であり、後者は意味重視の結果である。

## 2. 和製漢語の形成と中国語

漢語が長く用いられるのに伴って、中世以降もともと訓読みをした語の漢字表記を音読みにすることが生じた。かへりごと→返事 (ヘンジ)、ものさわがし→物騒(ブソウ)のような「訓読みから音読みへ」という読みの変化を経た和製漢語は實質に和語そのもので、単に漢字表記に音読みという形式的な装いを被せただけである。この方法で造られたものには、古くから「をこ→尾籠(ピロウ)」のような漢字の当て方を通して意味が変化する例もあれば、「おしはかる→推量、ひきゐる→引率、許しをめんずる→免許」のように和語の当てた漢字を抽出した例もある。そして量的には減ったものの、今日まで延々とその方法による造語が続いている。「腹が立つ→立腹、式を挙げる→挙式、札を改める→改札」のように、漢文の語順に沿うような構造で造られたものも多いが、逆に「心を配る→心配、酒に乱れる→酒乱」のように目的語が先に来る日本的な構造をしているものもある。この種の形成において、中国語からの作用が働かず、しかも日本独自の要素が多いため、日中の共通点が見いだせないが、「推量」など個別の語が中国語に入って現在でも使われている。

上記のような和製漢語の形成基盤を探っていくと、和訓の発達によるところが大きいことがわかる。その和訓は漢文訓読などを通して次から次へ

と漢字の意味を吸収し一訓多字という表記上の多様性を有するようになる。こうした漢字と和訓との意味的非均衡性が和製漢語形成の素地となっていると考えている。したがって最初から数少ない和訓をもって量的に圧倒的に多い漢字の意味に対応しようとするところに無理が生じるわけである。むしろ、和製漢語の形成に不可欠な要素は音読みである。それはまるで粘着剤のようものでどんなに異なる構造でも一つの纏まりとしてくっつけることができる。たとえば、「理不尽」のように文(リツクサズ)から語(リフジン)へと一語としての確立を実現させ、「心を配る→心配」のように長い音節の句や語を全部名詞に換える文法的メリットがあって、文中における応用を簡便化させ、表現上の便宜をもたらすことが和製漢語形成の誘因となっているだろう。

一方、音読みの増加と発達によって「同音による書き換え」も盛んに行われ、漢語本来の意味から脱して、別の意味へ変わったことで、同音によって書き換えられた新しい漢字語が誕生し、結果的には従来の漢語と異なる新たな形態創出となった。たとえば、本来漢籍にある「比興」の意味(詩の修辞作法の一つ)から、何らかの原因によって同音語「卑怯」が新たに現れてくる。同じ例は「強盛(強くて繁盛であるさま)→「強情」、  
「蚊虻(蚊と虻)→「文盲」、  
「名誉→面妖」にも見られ、後者の漢字語は音読みされ日本独自の和製漢語となる。そして「文盲」のように「文にクライ」というふうにと和訓的に解釈され、今日の意味定着に結びついたものもある。これらの和製漢語は時代的に遡れば、中国語との接点が見いだせるし、「文盲」のように現代中国語にも使われている例もある。漢字制限という第二次大戦後の文字政策によって、同音による表記の書き換えも大幅に進められてきた。書き換える前の漢字語は中国語由来の由緒正しい表記だが、書き換えた結果、二種類の新たな漢字語が生まれた。まず、a. 書き換えた日本語がそのまま中国語としても使われ

て同形語となった場合、「意嚮→意向；陰翳→陰影；火焰→火炎；雇傭→雇用；根柢→根底；亢奮→興奮；刺戟→刺激；聚落→集落；牴触→抵触；書翰→書簡；訊問→尋問；衰頹→衰退；曝露→暴露；拋棄→放棄；理窟→理屈；撰集→選集；撰修→選修；新撰→新選；諒解→了解；破摧→破碎；交替→交代」もあれば、b. 書き換えた結果、新たな日本語独自の語形となった場合、「移動→異動；銓衡→選考；鄭重→丁重；間歇→間欠；技倆→技量；決潰→決壊；浸蝕→浸食；尖銳→先鋭；嗜好→志向；杜絶→途絶；簇生→族生；拔萃→拔粹；綜合→総合；綳帶→包帶；連繫→連係；聯合→連合；彎曲→湾曲；叡智→英知；掘鑿→掘削；蹶起→決起；交叉→交差；弘報→広報；涸渴→枯竭；屍体→死体；障碍→障害；叮嚀→丁寧；輔佐→補佐；氣魄→氣迫；心搏→心拍；激昂→激高；饒舌→冗舌」のように、書き換えによって意味もそれに応じて変わってくることもある。

### 3. 近代新漢語と和製漢語

幕末・明治以降は、文明開化の波に乗って欧米の文物や知識が大量に移入されるようになってくる。それに伴ってとりわけ漢語の急激な増加の時代でもあった。『和英語林集成』（1867年刊）から『新訳和英辞典』（1909年刊）に至る40年間の漢語の占める割合の増加率（13.5%）は、『源氏物語』から『和英語林集成』に至る800年間の漢語増加率（15.3%）にほぼ匹敵しているから、その急増ぶりを浮き彫りにさせている。

その漢語の急増にはいわゆる新漢語が寄与していると言えよう。たとえば、

- a 中国語から直接借りる。「電気、電報、地球、銀行、化学、直径、風琴」
- b 中国古典語を用いて外来概念にあてる。「革命、文化、觀念、福祉、文明」
- c 日本人の独自の漢字意識で外来概念にあてる。「哲学、喜劇、郵便、美学」

のように、三種類に分けられる。aのように、中国語で書かれた近代知識にかかわる漢訳洋書や中国で出版された英華字典から直接取り入れたものもあれば、bのように、中国古典に使われていた言葉の意味を変えて転用するものもある。さらにcのように、純粹に和製漢語としてつくられたものも多い。和製漢語の視点からみれば、aははれつきとした近代中国語であり、日本語はむしろそれらを借用していたものである。bは中国語古典語として、新たに日本で作られた語形ではないが、日本で新しい意味を付与したところを評価すれば、「和製」の一種類と見なしてもよからう。それに対してcは、純然たる和製漢語と言えよう。ただし、上記三種類は近代においてすべて日本という土壌でさらに定着され、洗練されてから、中国へ再度借用語として利用される経緯を踏まえれば、どちらも中国語と関わることになる。

日本独自の新語創出は18世紀以降の『解体新書』（1774年）に始まる。その翻訳に見られる日本人の創意工夫による新語が目立っている。例えば「解剖、盲腸、軟骨、十二指腸、神経」などオランダからきた西洋概念への対応のために、新たに日本人が造りだした漢語がいろいろ生じてくる。さらに、森岡健二の指摘のように、「元素、水素、酸素」など外来概念への逐字和訳を経てから音読みとしての近代漢語訳語の成立も見られる。たとえば、嘉永二年（1849）の『砲術語選』（尾張上田仲敏輯、山田重春校、伊藤清民序、菊三屋蔵板）を調べてみると、

ワルムテストフ	温素
シュールストフ	酸素
リグトストフ	光素
スチッキストフ	窒素
ワートルストフ	水素
コールストフ	炭素

と、基本的に「ストフ=素」をベースに概念の逐字訳をもって漢字を当てていることがわかる。

訳語を考案しているうち、旧来の漢語を用いて

新概念に宛てることもしばしば行われた。先のb類のように、「経済、社会、文化、宗教、革命、観念、福祉」なども一般化していた。これらは、中国の古典語を用いて外来概念にあてた語は、漢籍に出典を求めることもでき、なおかつ近代訳語としての意味も働いている。これらの語に新旧の意味的な格差が他の第三者（外来概念）によって確認でき、日本語の中でその新しい意味に用いられることが先に認められれば、訳語の創意工夫の一種と見なすことが可能であろう。

こうした訳語の急激な登場を受け入れるために、明治初期から『改正増補和訳英辞典』（明治2年）、『和英語林集成』再版（明治5年）、『附音挿図英和字彙』（明治6年）をはじめ大量に刊行され、訳語の定着と普及に貢献した。とくに『和英語林集成』三版（明治19年）では和英の部に10,000語以上の増加が行われた。これらの語の大多数が漢語であるという。そのほか、人文科学用語を中心とした『哲学字彙』（明治14年）が刊行され、外国語に対して訳語を多く集めて語訳に当たっていた。「抽象、範疇、感性」などのように、近代に入ってから外国語の概念に対応するためにつくられたものは多かったが、さらに大正時代以降には、「周波、体系、暖色、脚光、時効、洗脳、公害、台本、弾圧、発禁、印税、協賛、団地、留年、座談会、赤外線、主題歌、適齢期、有機体、過渡期、既得権、紫外線、変質者」など、日本で独自に漢字をあてて組み合わせた漢字熟語が多く使われるようになった。

こういった新しい訳語を短期間に造ることによって、日本語の近代化が急速に進んだが、多量の訳語作りは、明治20年前後までつづき、それ以降安定期を迎えている。そして、その多くはそのまま近代中国語の新語として使われるのが特徴である。

#### 4. 和製漢語の東アジアへの拡散

以上見てきた通り、近代中国経由で入ってきた漢語や、日本人が独自に創出した和製漢語の蓄積のもとで日本近代語が形成されたのである。

19世紀の末から20世紀にかけて、アジア周辺国へこうした新概念に対応する新語の拡散が始まる。日清戦争（1894年）後、中国人が日本に留学するようになり、20世紀に入ってから、中国人留学生による日本の書物の翻訳が盛んに行われ、多くの日本新漢語が中国語に持ち込まれた。それが近代日中両国語における同形語の増大の一因となっている。

しかも漢字文化圏への拡散は新漢語だけに限らず、国字や和語、外来語の漢字表記も新語として中国語や朝鮮語の中に受け入れられるようになる。たとえば、

取締、組合、立場、入口、出口、広場、打消、引渡、場合、見習、紫陽花

のような訓読みをもつ和語でも、全部現地の漢字発音で中国語や朝鮮語などにとりこまれている。さらに、「腺、疝、蚘、蚘、蚘、蚘、糞、糞」など、新しい概念への対応として作り出された国字も近代化をめざす中国に必要なものとなるため、近代訳語の中国流入と同時期に、日本からその字形と意味が逆輸入されたと考えられる。

中国語への拡散に関して、20世紀以降、日本で出版された英和辞典を参照して英華辞典や『徳華大字典』（1920年）など、他の対訳語辞典が作られ、中国へ新語を伝える重要なルートの一つになったのである。そして、新聞雑誌や康有為、梁啓超、魯迅、周作人など、日本に滞在経験のある有名知識人の文章も日本新漢語を中国に伝える媒介をしている。たとえば、1906年の日本語版訳から中国語に訳された『共産党宣言』（陳望道訳、1920年）に「共産党、共産主義、私有財産、封建社会」など、同じ漢語が使われている。それは中国社会に大きな影響を及ぼすとともに、社会主義関係の語

彙の伝播には重要な役割を果たしたと思われる。

現代では両国の往来がますます増えて、例えば日本語のカラオケは「卡拉OK」と音訳されて中国語初の漢字ローマ交じりの言葉として、もっとも発行部数が多く、権威のある『現代漢語詞典』に登録されたことが有名である。そのほか、「写真、人気、人間蒸発、献金」なども使われていて、さらに「～中、～族、～屋、～風」のような接尾辞による造語も中国語において発達している。

## 5. 和製漢語の研究を通して中国語を見直す

近代漢語訳語のうち、上記の(ハ)は蘭学資料に見られるように今まで日本で独自に作られたものとされてきたが、同時代の漢訳洋書の精査の結果如何によってはその部分が見直されることもありうる一方、逆に、「art 芸術・美術、nation 民族・国家、idea 観念・理想」のように、ヨーロッパ原語の意味変化に応じて新たな類義概念として生まれる新語を系統的に追う必要がある。とくに「裁判・審判」「共和・民主」のように、同じ英語概念に対して、日中はそれぞれの漢語訳語を当ててから、お互いにさらに相手の訳語を導入し合い、少しずつ意味の棲み分けを図るような意味変遷のプロセスを、両言語の交渉史の一環として位置すべきである。

さらに、中国古典語を用いて外来概念に対応させた(ホ)の成立過程自体についても不明瞭な部分がある。『哲学字彙』の著者井上哲次郎の自筆本の調査を通して、むしろ訳語が先に成立し、その後漢語出典を付け加えるという過程を経ていることが判明しており、訳語の正当性を主張するためにその確たる証拠として中国の古典例を添えたにすぎないのではないかと疑われる。事実、「政治、文化、文明」という語も明治初期まで訳語とは関係なくずっと使われていた。そして、この中国の古典語を用いて意味の転用を図ったものといわゆる近代中国語から直接借用したもの(電

気、電報、地球、銀行、化学、直径、風琴)との境目は曖昧であり、「文学、小説、精神」のように、十九世紀の英華字典において英語との対訳関係ももちながら、果たして西欧の新しい概念に対応しているかどうかが問題となってくるケースもある。日本語においてその語の意味の再確認や取捨選択などを行って洗練された形で定着する過程を重視するならば、単に漢字表記と英語の近代的概念との結びつきを確認するだけでは不十分である。その定着過程を捉える必要がある。

和製漢語が近代以降の中国語に多く借用されてくると、中国語自身に語構成や文法上な問題点をもたらすことも現れてきている。

例えば、同じ漢字で書かれ、日本で訳され、作られた言葉が中国語へ逆輸入された際、本来、単純に考えれば、語彙レベルではなんの抵抗もなく中国語にも入ってしまうはずであるが、実際において、次のように、文法上ではやはり馴染まないところを見せている。

この工場は国营である ? 這家工廠是国营  
かれは男性である ? 他是男性

「国营、男性」は日本語の断定文の述語部に入るが、中国語の断定文の述語にはならない。このような単独として断定文構造に入らないものを中国語では「非謂形容詞」(述語になれない形容詞)と呼んで普通の形容詞と区別している。中国語の連体修飾において、形容詞が中心的な役割を果たしていることが知られているが、その形容詞は述語になることや、連用修飾になることも一般的な機能とされている。たとえば、普通の形容詞では、

安静 安静的環境 (連体)  
安静地思考着 (連用)  
这里真安静 (述語)

のように、連体・連用そして述語にも使える。しかし、いわゆる「非謂形容詞」は

国营、国立、男性、女性

のように、連体修飾だけに使えるが、他の二つの機能には使えないという不完全な性格を持ってい

る。

この種の漢語は接辞による造語が目立っているし、主述構造や連用修飾構造によるものも多い。したがって、和製漢語として日本から中国へ入ったことでより生産的で拡大しつつある。その中国語における成立の過程を究明するには和製漢語の形成という視点が必要であろうと考えられる。

中国でも日本でも和製漢語の話になると、ナショナリズムに走りたがる人が多い。特に上述するように、近代において日本語と中国語とがお互いに交渉しているから、両国にとっても借用語の問題がある。たとえば、人文科学用語の七割は日本語由来とか、日本借用語を離れたら中国語として成り立たないという中国側の主張がある一方、「中華人民共和国」は「中華」だけが中国語であるとは和製漢語という日本側の主張などは、いずれも具体的な範囲と統計を欠いた感情的な議論であり、日中言語交渉史としてより客観的な調査と研究が必要であろう。

#### 参考文献

- 佐藤喜代治「和製漢語の歴史」『講座日本語学4 語彙史』1983年、明治書院。
- 佐藤武義「和製漢語の成立過程と展開―「をこ」から「尾籠」へ―」『文芸研究』65、1970年10月。
- 古田東朔「訳語雑見」『国語研究室』第二号、1963年10月。
- 森岡健二『改訂近代語の成立・語彙編』1991年、明治書院。
- 沈国威『近代日中語彙交渉史』1994年、笠間書院。
- 荒川清秀『近代日中學術用語の形成と伝播』1997年、白帝社。
- 陳力衛『和製漢語の形成とその展開』2001年、汲古書院。
- 朱京偉『近代日中新語の創出と交流』2003、白帝社。